矢板が生んだ偉人⑥

山口太郎二と田中宗継

このシリーズも最終回となりました。今回は、日本一の栄冠に輝いた二人を紹介しましょう。

一人目は、京都三十三間堂の「通し矢大会」で優勝した弓道家の山口太郎二（田野原）、もう一人は、新作日本刀展で優勝した刀匠の田中宗継（泉）です。

三十三間堂は、千体仏と共に通し矢競技大会の会場としても有名な寺院です。この大会は、江戸時代初期から始められたという伝統ある大会です。現在は、六十ｍの距離を新成人者のみで競われていますが、元々は各藩（明治以降は各県）を代表する強者たちで競われ、しかもその距離は百二十一ｍもありました。

明治三十五年の大会で優勝したのは、田野原の山口太郎二でした。山口は若くして宇都宮藩士の弓道師範であった星野忠徳に師事し、たちまちの内に師範の座を獲得しました。この時、全国からの参加者は百五十余名で、見事に優勝という金的を射止めました。そして、大会会長の有栖川宮親王より賞状と白鞘の短刀一振りを賜っています。その後の山口を待っていたのは、全国各地からの弓道の指導依頼でした。家に帰っている時間は、ほとんどなかったと伝えられており、昭和六年に六十三歳で亡くなっています。

もう一人の偉人は、刀匠の田中宗継です。

田中 宗継

本名は兼次といい、明治三十四年四月に泉で生まれました。幼いころから鍛冶職の父親のもとで修業し、やがて矢板町京町（現在の上町）に分家し、弟子を養成しながら仕事に励んでおりました。

転機が訪れたのは昭和八年十月のことで、代議士でもあり刀匠でもあった栗原彦三郎を紹介されたことです。その志に共鳴し弟子となって日本刀の制作に打ち込みました。

その努力の甲斐があって、昭和十一年と同十八年の二回の新作日本刀大共進会で日本一の栄冠を勝ち取り、田中の名声はいよいよ高まって行きました。

しかし、田中はこれに甘んずることなく、当時刀匠として最高技術保持者と言われた笠間繁継師のもとで技術を習得し、「宗継」と名乗ることを許されました。昭和二十九年十月に五十四歳という若さで亡くなっています。

（矢板市史より）

（Ｔ・Ｓ）

「やいた応援かわら版」はリニューアルしてスタートします

「市民力かわら版」の後継として、平成２８年８月からスタートした「やいた応援かわら版」は、今号をもって最終号となりました。

このかわら版は、市民との協働・市民参加型の広報として、市民記者が取材・編集を行い、２か月に１度、紙面で発行しておりましたが、より早く、より多く、より身近な情報を皆さんにお届けできるよう、パソコンやスマートフォンなどで見ることができる、ウェブ版に令和２年６月からリニューアルします。

これまで、快く取材にご協力いただきました多くの皆さま、たいへんありがとうございました。

ウェブ版になりましてもご愛読いただけますよう、よろしくお願いします。

編集委員一同